

484 叙意一百韻 (12)

〔 89句から96句 〕

本文

平仄

- | | | | | | | | |
|----|-------|---|---|---|---|---|---|
| 89 | 瘦同失雌鶴 | ● | ○ | ● | ● | ○ | ● |
| 90 | 飢類嚇雛鳶 | ● | ● | ● | ○ | ○ | ○ |
| 91 | 壁墮防奔溜 | ● | ○ | ○ | ○ | ○ | ● |
| 92 | 庭渥導濁涓 | ○ | ○ | ○ | ● | ● | ○ |
| 93 | 紅輪晴後轉 | ○ | ○ | ○ | ● | ● | ● |

を腰につけて自省していた。西門豹の故智にならったわけである。朝議では、彼を推して侍御史としようとしたが、それを聞き、堅苦しい宮仕えを欲せず、梁沛地方にのがれ隠れ、町中で占いをして暮らしていた。靈帝の時、党人が禁錮せられる騒ぎが起こり、彼も変人ゆえに党人の嫌疑がかけられはしないかと恐れ、鹿車に妻子を乗せて地方を転々とさまよい、落穂などを拾って生活のたすけとした。あるときは粗末な旅籠に宿り、あるときは木蔭に雨露を凌いで、漂浪すること十年あまりだったが、最後に草葺の小屋をこしらえて住んでいた。時には食べる米が一粒もなくなってしまうこともあって、窮迫におちいったが、それでも当人は平然としていた。村の人は彼の暮らしぶりをこう歌っていた。

飯を炊かねば、甑こしきのうちは塵の積もった范史雲。

釜の中とて水あるばかり、魚が泳ぐよ、范菜蕪。

(荒川 美枝子)